

令和6年度秋田県産業教育審議会議事録（要旨）

1 日 時 令和6年11月19日（火） 13：10～16：00

2 開催場所 秋田工業高等学校

3 出席者 委員12名

山村 明弘（秋田大学大学院理工学研究科 教授）
松田 聡（国際教養大学国際教養学部教職課程 教授）
渡部 昌平（秋田県立大学総合科学教育研究センター 准教授）
黒川 匡子（株式会社ゼロニウム 取締役）
佐々木信行（矢島木材乾燥株式会社 常務取締役）
村上 亜紀（株式会社共和 取締役）
境田 未希（株式会社境田商事 取締役）
阿部 円香（株式会社杳 代表取締役）
高橋 源悦（秋田県産業労働部 産業政策課長）
坂谷 陽（秋田県中学校長会 会長）
坂本 寿孝（秋田県高等学校教育研究会 農業部会長）
佐藤 貴文（秋田県高等学校教育研究会 工業部会長）

4 日 程

(1) 開会行事

- ・教育委員会挨拶
- ・出席者紹介

(2) 学校紹介・授業参観等

(3) 審 議

【テーマ】高等学校における産業教育の改善と充実について

5 審議概要（要旨）

議長

本県に限らず、東北地方は少子高齢化が進んでおり、卒業後は首都圏を目指す高校生が多いと感じている。また、東北地方は首都圏に比べて就職先も十分ではない現状があると思う。産業教育のこれからを考えるためには、地域の産業を魅力的に小・中学生に紹介していくことが、高等学校における産業教育の充実に必要なのではないかな。

本審議会では、これまでDXへの対応について審議を行ってきた。生成AIの発展など、産業界のみならず、社会においてAIを無視することはできなくなっている。また、専門的な知識だけでなく、課題解決能力、課題発見能力、チームワークやリーダーシップなどといった社会人基礎力の必要性が指摘されている。

本日は授業参観に加えて生徒と会話できる機会をいただいた。高校の教育プログラムだけではなく、生徒の発言も含めて審議を行いたい。私自身は、生徒の発言を聞き、産業教育を考える上でダイバーシティについて見直す必要があるのではないかと考えている。特に、建築科の生徒は女性が多かった一方で、電気エネルギー科の生徒は男性が多かったと思う。本県の産業において、女性が魅力を感じているかどうか。本県において、女性の就職口を増やしていくことを考えると、専門高校において、女性にどのようにアピールしていけばよいのか。ダイバーシティを含め、特に本県における女性の活躍についても委員の意見を伺いたい。

テーマに関して、学校紹介、事業参加など、感想でも構わないので、よかった点、改善点があれば紹介いただきたい。

A委員

授業参観等、とても素晴らしい取組であった。モチベーションの高い生徒がたくさんおり、特別な取組と優秀な生徒を見せていただいたと思う一方で、そうではない生徒もいるのではないかと少し心配でもある。このような取組については、どういった生徒にはどう効果があって、あるいは参加していない生徒にどう波及効果があったかについて、ぜひ効果検証を行い、機会があればその結果等について教えていただきたい。

もう1つ、学校説明にもあったが、教員が秋田県立大学で研修を受けるなど、素晴らしい取組がなされていた。大学ではBYODを進めており、学生はパソコンを購入して入学することになっているが、教員がそのパソコンを使わせられない、教員が紙媒体で資料を配付すると学生は重いパソコンを持ってこないといったことが起きている。教員が生成AIにせよパソコンにせよ使えないと、生徒や学生に情報を提供できない。教員が使えるということが重要である。その点、工業高校では担当の先生が使える。ただし、担当以外の先生は使えるのか。大学も同じであるが、大人が勉強しなければならないことが一つの課題ではないかな。

もう一つ、生徒のモチベーションについて、今日の生徒は目標があってやってきたとのことであったが、そうではない生徒もおそらくいると思う。第1志望学科ではなかったとか、やりたいことがわからないといった生徒がモチベーションを高めるには、面談であるとか、何が好きかを聞き、一緒に探す必要があるのではないかな。本県では「秋田わか杉キャリアノート」を小・中学校で活用し、高校でもいわゆるキャリアパスポートが用意されている。その活用で、自分の目標を振り返り、何ができて何ができなかったかの整理を面談と合わせて積極的に行っていく必要があるのではないかな。この辺りもしっかりと制度として、学校教育の中に入れていく必要があると思う。大学でもこのような取組を行っているが、大学1年生の前期ではほぼ100%の学生は書くものの、そのあとは学年を追う毎に10%から20%ずつ減っていき、大学4年生段階でほぼゼロになる。おそらく、大学よりも高校、高校よりも小・中学校の段階がうまくいくと思うので、ぜひ進め

B 委員

ていただければと思う。

発表した生徒はすばらしく、モチベーションの維持ができています。高等学校の学習指導要領にある知識・技能、思考力・判断力・表現力、そして学びに向かう力、人間性等、この3つの要素が今日の発表者に限っては非常に高次元のレベルで生かされていると感じた。ただし、全員の生徒がそうなのかというと、やはりさきほどの意見と同じく、そうではない生徒もいると思う。このことを克服するためには、やはりよい例として先輩の発表を見せるということ、こうすればよいという道筋を見せてあげることが非常に大事である。これは高校1年生だけではなく、体験入学で中学生にもいろいろと見せていると思うが、もっともっとアピールしてよい。本日の発表はすべて結果だけを見たが、私としてはプロセスをもっと知りたい。どのような失敗をしてここに至ったのかというプロセスがとても大事である。そのあたりも伺える時間があるとよかった。

あとは、どうやって若い世代に産業教育に目を向けさせるのかといった話題があるが、高校を卒業して就職する生徒は普通科にもいる。本県の普通科のある学校、いわゆる入学時に普通科である学校においては、124名が就職している。産業教育というと専門高校を対象に取組などを発表できる機会はあるが、そうではない生徒もどこかで披露できるとよい。ただし、学校単独で行うことは難しい。例えば、近隣の専門高校が発表会等を開催する際に「よかったら参加や見学してください」といった声掛けをする。ほぼ進学する生徒の中にいる少数の生徒かもしれないが、その後の人生を決めることである。そのような機会があってもよいのではないか。普通高校から就職する生徒は多くはないので、進路担当の教員からしか就職に関する情報が得られない可能性もある。就職者の多い高校であると職場定着就職支援員が様々な企業とのやりとりなどを行っているので、そういった工夫ができないかと考えている。

議長

私も以前から産業教育においてロールモデルの必要性があると考えている。特に、秋田工業高校では、電気エネルギー科では男子生徒が多く、建築科は女子生徒の方が多かったが、世の中はダイバーシティの話題が非常に大きくなっている。例えば、女子生徒が専門高校でどのくらい活躍しているかなど、データがあれば教えていただきたい。女子生徒が本県で活躍するためには、アウトリーチを含めてロールモデルを見せる必要があるのではないか。学校紹介では、建築科の男子生徒が木材に関するものづくり大会で受賞したという紹介があった。本県の場合、木材に関する産業は重要であると思う。こういったことをどう若い世代に伝えていくとよいのかについて、意見があれば伺いたい。

C 委員

ロールモデルの存在、ロールモデルが必要であることは高校だけではないと感じている。だからこそ、せめて高校から必要なのではないか。高校と大学を経て30代くらいになると、仕事をしていく上でロールモデルの存在がだんだんと減っていく。これは難しいことである。先ほどの授業参観で発表した生徒は小さい頃からおそらく組立ブロック玩具で遊び、これがやりたいと思ってきたと考えられる。私が高校生の時にはこれになりたいというのはなかった。無理に全員を同じ型にはめるような、何かやりたいことを見つけなさいというキャリア形成をしていくのでは、今までの日本のやり方と何ら変わりはないのではないか。

議長

例えば、本日のように建築科で木材について学んでいる生徒のような人材をどのように育てていくことができるか。

D 委員

先ほどの学校説明で、特許や実用新案について非常に熱心に取り組んでいると

	いった説明があった。私が秋田工業高校に訪問したのはおそらく3回目で、過去2回においてはそのような印象はない。今回は特許の話題があり注目している。会社では、フローリングの表面にペットボトルのペット樹脂を張って、木材があまり収縮しないようにする特許を取得している。そのフローリングが大変注目されていて、全国のアリーナ、体育館で使われている。高校の段階から、特許や実用新案について取り組むということは、非常に社会に出てから役に立つ。高校でのこのような取組はすばらしく、心に響いた。授業参観の中でも、建築科の男子生徒2名は大学に進学する、うち1名は木材に興味があるということを明確に発言していた。数ある中で木材を選んで今それが好きであると言えるのは、ものすごいモチベーションの高さであると思って見ていた。目的意識は育ってきた環境もあるのではないかな。生徒は身近に大工さんがいたと発言していたこともあり、小さい頃からの経験と高校3年間の学習環境からそう言われたのであろうと見ていた。いずれ、そのモチベーションの高さに感心した。 木材の利用からすると、秋田杉を活用していきたい。木材には広葉樹と針葉樹があるが、針葉樹である杉は床には向かない。体育館の床などにはとても使えないが、ペット樹脂により強度を高めて杉を有効活用していきたい。杉の花粉症対策もあるので、成長している杉を伐採して有効活用し、CO₂の吸収の速い若い樹木を植え替えてSDGsに貢献していきたいと考えている。
議長	まさにあの生徒は小さい頃からロールモデルがそばにいたと言っていて、それがものすごく強く影響して今の彼につながっているのではないかな。 特許の件について、高校ではどのように取り組んでいるか。
E委員	クラブ活動においてそのような活動を行っている。様々なところから要望を聞いて、牛乳パックを分解する装置であるとか、空き缶を潰す機械については他校からの依頼により共同開発を行っている。それらの取組を特許出願してみよう、特許について勉強してみようということであった。特許申請ということ自体にチャレンジする教員の実力、情熱もあった。様々なきっかけは大切であり、情熱を生徒にどのように向けられるか。先ほどの発言にあった木材加工に取り組む生徒は、ずっと就職を目指していた。木材加工について指導できる先生もなかなか少なく、大工の棟梁さんをお願いすることもあるが、教員がしっかりと指導したところ、木材加工の面白さを知り、若年者ものづくり大会に出場、入賞したことから、更に木材加工について探究してみたいという気持ちになり、相当迷いながらも大学進学に決めたという経緯がある。きっかけをつくることも大切なのではないかな。
議長	特許教育は全国の高校においてどれくらい行われているのか。大学では、知財について座学で教えたりはするが、秋田工業高校での取組の方が進んでいるのではないかな。
会場校教員	例えば、12月には2年生を対象に弁理士を招聘し、知的財産セミナーを実施する。
議長	生徒の反応はどうか。
会場校教員	熱心に聞いている。
議長	当然であると思う。

F 委員

先ほどの生徒の発表はどちらも興味深く、大変熱心で、令和5年度の提言に「自らスキルを上げて向上し、学び続ける力」とあったが、まさにそのとおりであった。特に、建築科で設計図を引く時にはたくさんの人のことを知らないといけない、広い知識をもたないといけないというところまでを含めて考えている。すでに自分でスキルを上げていく、そのような姿勢ができているということにすごく感心した。

D X、映像やエンターテインメントについて、県内の高校の先生から、授業の中でそういった講義をやってくれないか、こういったことを生徒と実現したいが、自分たちの環境でそれが実現できるかどうかなどについて相談をよく受けるようになった。とても熱心であり、本県も教員を含めて変わってきていると感じている。特別講義は自己紹介から始まるが、生徒はD X、映像やエンターテインメントといった業種の会社が本県にあるということを知らず、驚き、自分たちの知っているようなタイトルの仕事を秋田でやっていることについて気づきがあるなど、先ほどの木材の話題もそうだが、県内でも様々な仕事がある中、現場の話がやはり一番面白く、生徒の関心も高いと思う。たくさんのジャンルに関わる多くの大人がそのような刺激を常にふんだんに生徒に提供できるとよいのではないかな。私が仕事を始めたのは10代後半からだが、どこで自分の道を見つけるかはわからない。生徒や学生のうちに地域などからたくさん刺激、種を与えてもらったことがどこかで発芽するかもしれない。そのきっかけが本県の企業や本県で働く方の話であると更にすばらしいのではないかな。

議長

先ほども大学では学生より教員の方がパソコンを使えないといった意見があったが、高校教員においては、かなりI C Tへの移行が進んでいるという印象か。

F 委員

進んでいる。高校教員の意識として、専門的ではないながらもI C Tを活用してこういうことをやってみたいという要望がたくさん出るようになった。技術的には専門家が支援するが、そういった要望や相談を高校教員からたくさんいただくことは今まであまりなかった。大分変わってきたと思う。

議長

この話題は、本審議会の中でもたびたび出てきている。専門高校だけでなく、情報教育をどのようにしていくかを審議し、情報科の教員を本県でもっと多く採用してはどうかといった意見があった。ところが世の中は変化してきていて、委員の意見のとおり、本県の高校教員は大分変わってきたということと思う。その動機、理由は委員から見るとどういったことが挙げられるか。

F 委員

生活の中の変化はもちろんある。加えて、D X化を進める様々な施策を受けて教員も変化しているのではないかな。

議長

もう1点。企業の存在をあまり知られていないということについて、意見はないか。教育界でのことか。

F 委員

教員からの依頼はあるので知られている。しかし、生徒はゲームで遊んだり、映像を見たり、CMを見たりはしているが、それを作る会社が本県にあるというところまでは思い至っていない。実際に企業の方と会い、私たちが作り、こういうことをしていると伝える機会が大事なのではないかな。

議長

「KocchAke（こっちゃけ）！」などで企業紹介はしているものの生徒にはあまり浸透していないかもしれない。

A委員	弁理士などを活用した事例が紹介されたように、外部講師を活用することはとてもよい。しかし、個々の教員が誰かを探すのではなく、教育委員会が各分野の依頼先などについて情報提供し、実績等を紹介するなどの連携協力はできないか。経費を含めた仕組づくりが重要であると思う。
事務局	高校での地元企業の紹介については、地域振興局が主催し説明会などを実施している。また、本県の小・中・高・特別支援学校の児童生徒が職場体験する際は、県内企業等の体験先情報を検索できる「広域職場体験システム（A-キャリア）」があるので紹介する。
G委員	委員から本日の授業参観時に発言のあった「みんなができないことができるのは素晴らしいこと」がまさに産業教育における教育方針になればよい。それが生徒に伝わり、誰もがすることではないことを今勉強していて、結果、社会や本県の役に立つということを自覚できるような場面があればよい。ものづくりだけを教えるのではなく、それがどのように人の役に立っているのかということ、生徒が自覚することが大きな部分を占めるのではないか。ものをつくるということだけに着目してしまうと、建築科の図面のように見えやすいものについては集中しやすいと思うが、例えば、自動車やロボットの部品の製造となった時に、それが大きな役割を果たすということに周りも気づいてあげなければならない。本人が好きでその役割、分野に進む場合は気づいていると思うが、それを周りが認めることが大事になってくる。 もう1つ、働き方が大きく変わっている時代であり、プロフェッショナル人材を副業で雇うことができるようになり、マッチング事業が頻繁に行われている。募集をかけるとプロフェッショナル人材からアプローチがある。大体3か月から6か月、長いところで1年間の契約で月何時間など、オンライン会議でやりとりをする。このように、県内にいなくても本県に貢献したり、そういう意識をもって仕事したりできるようになっている。本県に貢献したいというシビックプライド的なものを育てた上で、県内にいなくても本県に関わる仕事ができるという働き方についても生徒に伝える何かがあればよい。
議長	自動車などの部品製造の重要性を認識させることが大事であるとの意見があった。おそらく、高校生は自動車などの最終形態しかイメージできていない。例えば、自動車の部品をしっかりと作ることはものすごく大事であることを、高校生に伝えるにはどうしたらよいか。
G委員	まずは周りがその人を認めるということが大事である。興味がある人は自らサークル活動なり、グループやクラブ活動に参加している中で埋もれている生徒も少なからずいる。そのような生徒に対して、例えば、工業高校であなたがこのように学んでいることはとてもすごいことであると、教員若しくは周りの生徒が伝えることが一番大事である。本県でも産業部品を製造している。このことについて、大人になってからではなく、中学生ぐらいの時からわかっていると、自分が秋田のためにできることへとつながっていき、かつ、進学した高校であなたたちがやっていることは素晴らしいということが意識づけられていくと、より成長しやすいのではないか。
議長	本県には大手電子部品メーカー等多々あるが、リスペクトが不足しているような気がしている。
C委員	それは発信力が不足しているからではないか。授業参観の時に女子生徒が言っ

	ていたように、若い世代のSNSへの投稿写真等、高校生の視点は異なっている。SNSやデジタルメディアマーケティングを行う際は、思い切って高校生又は大学生など、20代前半の人に任せていかないと、本県の魅力は発信できないのではないか。私から見た秋田と高校生から見た秋田は異なり、年代によっても異なり、発信力も弱いのではないか。
議長	発信力を身に付けるにはどうしたらよいか。その人の感性か。
C委員	感性もあるが、例えば、本県の魅力発信のウェブページを作る時はオープンコンペにする。また、1人や1つの会社に任せないで、春はこの会社、夏はこの会社などとやっていくと、より秋田の魅力を発信できるのではないか。
議長	競争できる環境が必要であると捉えた。
C委員	ロサンゼルスにあるスタジアムでは、本県の日本酒が販売されている。海外に行くと、この銘柄を知らない人はいないほどである。このことについてもっと発信していきたいし、他にもたくさんあると思う。アメリカで本県産の納豆を買うことができるし、本県で生産する納豆の約70%は県外に出荷しているなど、本県の魅力は満載である。サイダーであったり、伝統工芸の食器であったり、発信をうまくできる人に任せていくということも大事であると思う。
議長	そういった人材を育てなければならないし、県外から来てくれてもよい。そのためにはどうしたらよいかについて提言できたらと思う。
C委員	最初に、議長からダイバーシティが重要になってきているとあったが、女性だからと分け隔てない方がよい。結局、そこで壁やくくりができる。女子生徒をもっと工業や農業、商業高校などに入学させたいのであれば、そのようなことは言わない方がよいのではないか。
議長	大学の理系は女性が圧倒的に少ない。なぜそうなるのかについて、学生にアンケートを取ったところ、高校時代の数学や理科の教員が男性ばかりであることがかなり影響しているのではないかとというのが学生の意見である。ロールモデルについて取り上げたのは、そういった経緯からであり、活躍している女性のロールモデルが見えていないといけないのではないかと考えている。押しつける必要はないが、多才な方が様々なところで活躍する様子が見えるような発信が必要ではないか。
A委員	例えば、別の審議会や協議会では男性が多く、社長も男性が多い。例えば、学校での外部講師も男性が多い。意識的に女性技術者に依頼するようにしないと、どうしてもこの業界は男性ばかりなのではないかという印象になる。そこは留意する必要があると思う。
H委員	本日の授業参観において、特に、建築科の生徒がそれぞれ大事なことを自分の言葉で発言していて単純にすごいと思った。自分の高校時代を思い返してみると、あの様に聞かれて即座に答えられたかというとなえられないと思う。私はいわゆる普通科に通い、進学一色な感じで1年生から3年生までひたすら言われ続け、そのまま進学した。進学後は秋田に帰って起業し、社長を務め、最近では学校に依頼されて講話等をする機会が増えている。進学するにしても、県外の方が圧倒的に選択肢はあり、私もその選択肢を選んだ1人である。県外、国外の場合もある

が、外に出ることによって本県ではできない様々な体験や経験ができる。その上で、今は秋田に帰ってきてどう活かせるかについて考える日々である。この感覚を自分が高校生の時にもっともつことができていたなら、また違ったのだろうと思う。進学するにせよ、いつか秋田に帰ってきたいと思わせるような、先ほどから話題になっている企業と交流する機会、話を聞く体験などが今後更に必要になってくるのではないか。自分の過去の否定はしないが、大人になり、実際に働くとなった時に、資格や技術などを身に付けていた方が圧倒的に選択の幅が広がる。極端な例ではあるが、宿の改装に大工や電気工事の方などが関わる。自分がその資格を持っていたら自分でできるなど、進学一辺倒ではなく、視野が広がるような経験や体験ができていたらもっとよかったと思う。

議長

高校では「総合的な探究の時間」など、大学入試のことだけではない教育がなされていると思う。そのようなことがあり、今日の授業参観の生徒のような発言などにつながっていると思う。

I 委員

今日の授業参観での生徒の発言には、例えば、中学生の時や小さな頃に興味をもった、あるいは先輩の姿を見てやってみたいと思ったとの発言があった。興味をもったことを、更に伸ばしていくことは非常に大切である。後継者が少ない中、ものづくりは楽しくてやりがいのある仕事であると思ってもらえるような教育も必要ではないか。その上で、大学や専門学校に進学したり、職業能力開発校に進学したりし、ものづくりが将来の仕事になっていく。また、企業に就職するだけではなく、起業される方もいる。起業という選択肢を高校生の時から知っていることも大切ではないか。先ほど、宇宙エレベーターロボットの課題に取り組む生徒の様子を見たが、うまく動作しない時には自らどう解決していけばよいのかなど、向上心をもって取り組んでおり、向上心の高い人は、将来的に、起業して地域の課題を解決するなどのスタートアップにもつながっていくと思う。

J 委員

生徒を見て一番はっきりしたのは、建築科の生徒に「どんな力が必要だと思うか」と聞いた時に、高度な技術とか、知識とかと言わなかったことがとてもうれしく、それが答えなのだろうと思ったことである。宇宙エレベーターロボットの課題に取り組む生徒にもいろいろ聞いたが、少なくとも、今日の生徒に共通しているのは、何々のために貢献したいという意識が根底にあるということと、もう一つ、高校生なりの使命感、自分はやりますという考えである。中学生は様々な発想はするが、それは大人になってからとか、いつかとか、自分で今やるかとなるとまだまだ弱い。高校生ぐらいになると、確実にそれに近づいているのではないか。

もう一つ、自己肯定感が強い。つまり、この学校で学び、この学校でやっていることはよいことである、自分の力になっている、と認められているからあのくらい話すことができているのだろうと思う。それは秋田工業高校の先生方が丁寧に生徒を育てているからだろう。

もう一つ、これは最近の気づきである。ようやくコロナ禍が終わり、中学校では職場体験が再開になった。発表会に職場体験先の方を呼んだところ「気づきが2種類ある」と面白いこと言っていた。1つは、その職場で必要な知識とか、技術とかの工夫、いわゆるその職場なりの内容にフォーカスをする生徒が半分、残りの半分はそこで何を作っているか、何をしているかではなく、その人、説明してくれた人、働いている人にフォーカスをする。このように、二分していると教わった。中学生の振り返りを見てもやはり分かれている。子供たちのリアルな体験の中での気づきは、仕事の内容と人という2つの視点である。そうすると、先ほどの発言にあったが、産業教育の改善・充実とは、必ずしも専門高校が主体と

	なるものでもなく、当然普通高校においても、様々な人との出会いであったり、専門家の話を聞く機会であったり、カリキュラムには様々な制約はあるかもしれないが、インターンシップであっても起業家教育の視点を盛り込んでよいのではないか。それは、無理なくできるのではないか。
議長	何かのためにというところで、中学生の方が弱く、高校生の方が強いとの発言があった。特に起業、世の中のためにという意識は、高校で高まっているということか。
J 委員	中学生の段階では、発想など確かにその内容として面白いものはたくさんある。しかし、それを具現化できるかと言った時に、やはり、ものづくりであれば技術は必要であり、知識が必要であり、ベースになるものをある程度学ばなければならない。そこまでの見通しまでは、まだまだ立っていないのが現実ではないか。それはそれでよいと思う。
G 委員	今の意見について、例えば、小学校から高校でも行うごみ拾いの活動において、小学生の時に周りからかけられる声は「かわいいね」などである。中学生になると「ありがとう」と言われ、初めてゴミを拾うことがよいことであるという認識をもつことになると思う。高校生になり「ありがとう」と言われると、自分が行ったことに対して「ありがとう」と返ってきているといったように、段階があり、同じ1つの活動でもとらえ方は異なる。それがおそらく成長である。産業教育においても、もしかしたら、小学校からものづくりを一貫した教育活動として取り入れるとよいのではないか。そうすると、ものづくりに対し感謝されることへの反応が変わってくるのではないか。
議長	自己肯定感は周囲からのレスポンスによって異なるというか。やはり、他者からありがたいと言われると、少しやる気が出るということか。
K 委員	意見を聞きながら、産業教育が全てではないが、産業教育を推進するということは、キャリア教育の大きな根底につながっていくという思いを強くした。生徒のみならず、保護者の方々、家族も含めてもう少し地域や地元の産業に意識が向くよう、更にキャリア教育を推進し、本県について理解を深めていく必要があるという思いを強くした。
E 委員	失敗こそ財産であり、失敗を改善しながら、課題解決能力を高めていくことが重要である。本日の授業参観では、生徒がそのようなことを経験してきたからこそ、自分の言葉で話すことができたのではないか。本日学校紹介をした生徒は1年生である。経験が浅くたどたどしい説明もあったが、頑張っていた。そのような経験を繰り返していくうちに成長していく。それが教員の喜びである。様々な提言は今後の教育活動に生かしていきたいと思う。
議長	いただいた意見を今年度の提言とし、審議を終了する。